

米澤鐵志さんを追悼する

2022年11月22日 白川真澄



京都の米澤鐵志さんが、11月12日に亡くなりました。享年88歳、私たちの運動の先輩で、私を含めて随分多くの人たちがお世話になりました。私が米澤さんと出会って一緒に活動したのは、1960年代半ばのことでした。

米澤さんは広島島の爆心から750メートルで被爆したのですが奇跡的に回復し、高校中退後に日本共産党に入党し、原水禁運動に参加。24歳で立命館大学に入学して京都に出てきて学生運動に加わりましたが(全学連反主流派)、1961年の共産党第8回大会で「社会主義革命派」として除名されました。その後、「社会主義革新運動」(「社革」)に加わり、京都の南病院(トロツキズムの旗頭の一人であって大屋史郎さんも、医者として勤務)で働いていました。私は1961年に京大入学と同時に共産党に入党し学生細胞のキャップをしていましたが、1964年に宮本顕治が牛

耳る党中央に反抗して角田 淳(江坂)さんや同志社大学の児玉正人(片桐)さんらとともに除名され、志賀義雄さんが率いる「日本のこえ」に加わっていました。ベトナム反戦運動の波が盛り上がりつつあるなかで、「共産主義者の結集と統一をめざす」動きが生まれ、日本のこえ、社革、「統一有志会」(統一社会主義同盟から分かれた春日庄次郎さんのグループ)、無党派の共産主義者(武藤一羊、栗原幸夫さん)などが合流して、紆余曲折がありましたが1966年末に共産主義労働者党が誕生しました。

これに呼応して京都でも共労党京都府委員会を立ち上げたのですが、ここで初めて私は米澤さんと顔を合わせ、苦楽を共にすることになりました。委員長は「社革」出身の山本徳二さん(京都総評のオルグ団長)、私が書記長でしたが、指導部には児玉さんや北川靖一郎さんたち若手と並んで30代の米澤さんが入りました。他には田中真人さん(後に同志社大学人文研教授)が機関紙活動を担当してくれたり、大谷 勉さん(京大大学院経済学研究科、後に関学大教授)や北沢恒彦さん(京都ベ平連)が加わるなど多彩な顔触れでした。

京都の党は、学生運動には宮越隆夫(岩木 要)さんが率いた民学同(後にプロ学同)を通じて強い影響力をもっていました。労働運動には足場がありませんでした(社青同解放派や中核派関西委員会が先行して優れた活動家を組織していました)。そこで、反戦青年委員会の運動に力を入れ、大学を出たばかりのメンバーもすぐに反戦青年委員会で活動するといった方針を取って、何とか労働者のなかに食い込もうと努力しました。米澤さんは、南病院の労組で活動する数少ない労働運動の活動家でしたが、いつも柔和な態度で接してくれ、私たち20代の血気盛んだがお

金のないメンバーの面倒をよく見てくれました。年上だったのですが、米澤さんのことを「よねちゃん」と呼んで、親しく付き合ってもらいました。

共労党は1969年5月の大会で実力闘争の選択をめぐる分裂し、旧「社革」メンバーが離脱しました。京都でも山本徳二さんたちと袖を分かっことになり、米澤さんも山本さんと行動を共にしましたが、その後も実力闘争を選んだ私たちを理解し支援してくれました。米澤さんの当時の想いは、2年前に刊行された『語り継ぐ1969——糟谷孝幸追悼50年、その生と死』（社会評論社）に寄稿してくれた「60年代の私」の文章から汲み取ることができます。

私は1969年に上京して党の専従の仕事に就いたので、米澤さんと顔を合わせる機会はなくなりました。年月が定かではないのですが、のちに何かの折に顔を合わせた時に「おい、元気かい」と優しい笑顔で声をかけてもらったように記憶しています。

人生の最後まで運動に関わり続けた米澤さんには尊敬の気持ちを持つと同時に、お世話になりましたと感謝するだけです。